

《基礎づけ》の序文

山 口 勲

9

カント倫理学の入門書として、《道徳形而上学の基礎づけ》がすすめられる。しかしこの書物を読んでその意図を少しでも整合的に理解しようとする、直ちに暗礁に乗り上げる。《基礎づけ》第二章のかなりの部分（三十二節以降）は純粹道徳哲学、すなわち倫理学の理念的な合理的部分に相当する議論を中心とするし、第三章は実践理性の部分批判、すなわち理性はいかにして実践的でありうるか、に相当する議論の一部を扱っている。《基礎づけ》の主軸は第二章にあると思われないが、そうするとカントは序文十一節の冒頭で、「私は道徳形而上学を他日に発表することにして、この基礎づけを先に出す」と書きながら、なぜ第二章で実際に道徳形而上学の議論を展開したのであるか。この部分カントは誤って挿入したとは考えられないが、それではこの部分はカントの意図的な一時的離脱なのか、それとも必然性のあるものなのか。この問題の理解の仕方によって、第二章と第三章の関係の密度も変わってくる。そこでこの疑問を解決する手掛りを序文の分析に求めて、《基礎づけ》の意図の整合的な理解に努めてみよう。

《基礎づけ》の序文は十四節に分れる。このうち六節までに異論はなからう。要するに、物理学と倫理学とはそれぞれ自然の形而上学と道徳の形而上学という理念をもち、前者は経験的物理学、後者は実践的人間学と完全に分離して考察すべき分業の利益を論じている。

続く七節は所論を道徳の形而上学に限定し、十節までにこの形而上学を扱う意図が説かれる。そしてこの四つの節でカントが随所に繰り返して強調している主旨は、道徳の形而上学は純粹道徳哲学であり、純粹な先天的原理や絶対的必然性をもつ道徳法則を扱い、できる限り純粹意思の理念と諸原理を究明することである。この主旨は第二章の題名「通俗的道徳哲学から道徳形而上学への移行」、および第二章三十二節以降の内容と対応するとみてよからう。ところがカントは、すぐ次の十一節冒頭で、《道徳形而上学を他日に発表し、基礎づけを先に出す》と書いているのだ。もし七―十節で語られている道徳の形而上学と、十一節冒頭で

他日に発表すると書かれている道徳形而上学とが同じだとすれば、他日に発表するはずの道徳形而上学がどうして第二章で詳しく議論されているのか、全く理解に苦しまねばならない。この二つの形而上学は同じなのか異なるのか。

そこでまず、同じだと解しながらも《基礎づけ》第二章に、なぜかの部分が挿入されたのかを説明しようとするA・R・C・ダンカンの推定を検討の材料に用いよう。彼は《基礎づけ》の軸を〈実践理性批判〉の一次的に限定された代置物とみるが、その立場から第二章のこの部分を位置づける。その論旨の要約と疑点を指摘してみよう。

カントの友人J・G・ハーマンはヘルダー宛の手紙(一七八四・二・八)で、「カントはガルベのキケロに対する反批判——彼はその題名をまだ決めてない——の仕事をしているそうだ」と書いている。事実ガルベは一七八三年キケロの《義務について》の翻訳を出し、後にその翻訳の覚書きや注訳書を公刊した。カントはこれらの本を一冊にまとめて所持していた。カントがこの作品を読みそれに応答することを望んでいたとすれば、《基礎づけ》第二章の構成を分明にする何ものかが、この本の中にあるかもしれない。

(1) カントは《基礎づけ》を書く以前から、純粋道徳哲学を書く意図をもっていた。しかし彼は、この型の形而上学はその基礎づけとして実践理性の部分批判を必要とすると考えるに至った。これを準備するのが《基礎づけ》の目的である。

(2) 彼はこの仕事に着手しつつ、ガルベの刊行したキケロの《義務について》を読んだ。ガルベの作品は、カントの道徳の形而上学の理念によって置き換えられるべき種類の通俗道徳哲学を意味していた。この本でガルベは、キケロが義務と自愛の衝突を解決する普遍的規則を探していることと連想した。

(3) カントはガルベのこの関心に刺激されて、彼の主要意図から一次的に離脱することになった。

(4) 義務によって自愛が拒否される種類の意思を記述する原理が、また行為の規範的規則として役立つかもしれない。かくてカントは、一個の分析的石で二羽の哲学的鳥を射止めようと決意した。

(5) したがって第二章の題名にある通俗道徳哲学はガルベに代表される型のものであり、通俗道徳哲学から道徳形而上学への移行の目的は、この型の通俗哲学は純化されることによって、義務と自愛の衝突という倫理学の中心問題の先天的議論となりうることを示すことであつた。^(注)

以上の五項目のうち、(1)は確かである。カントは純粋道徳哲学を書く意図をすでにヘルダー宛の手紙(一七六八・五・九)で述べているし、この純粋道徳哲学に実践理性による基礎づけの必要なことは、自然の形而上学に対する理論理性の批判の関係を考えてみれば直ちに明かになる。

(2)と(5)の推定もそれ自体としては何ら誤りでない。確かにキケロの《義務について》は、この中からカントが道徳形而上学の理念へ純化したと考えてもよい内容が含まれている。しかしこの三項目と、(3)および(4)の推定は必然的結びつきをもたない。

まず(3)の一次的離脱に求める推定は、全く説得力をもたない。なぜなら、カントが《基礎づけ》の仕事に着手しつつ、キケロの《義務について》を読んだとしても、仕事をしている期間が序文の十一節目から第三章を書く間ならば、一次的離脱も予想されぬことはない。しかしカントは十一節の冒頭で、〈道徳形而上学〉を他日に発表すると書きながら、同じ序文の最後の節(十四節)で本文の進行順序を予告し、第二章の題名を書き込んでいる。わずか二頁にもみたくない距離を書き進む間に、他日に発表する〈道徳形而上学〉が第二章で採り上げられる予告をするほどの大きな変更を受けるだろうか。なるほどダンカン¹⁾は、他日に発表する〈道徳形而上学〉は純粹道徳哲学と同じく経験を全く含まない議論を扱うにしても、かなり通俗的にしうるとカントが考えていたことを認めている。それなのに、彼はこの区別まで思い至りながら、(2)と(5)の推定を(3)と結びつけるに留めた。しかし義務と自愛の衝突をも解決しうる普遍的規則を探求する第二章は、《基礎づけ》にとって単なる離脱でなく、全体の構成上で全く必然性のある部分だと考えた方が整合的に理解できるのではなからうか。(4)の適否は、その検討を終えた後でおのずと明らかであるであろう。

そこで我々は、序文十一節の冒頭にある他日に発表する〈道徳形而上学〉と、序文七―十節、十四節、および第二章の道徳形而上学とは、果して同じ内容のものなのか、という設問を再び繰り返し、この問題の解決を序文十一節―十四節の分析に求めてみよう。

二

カントは十一節の冒頭で、〈道徳形而上学〉を他日に発表し基礎づけ(Grundlegung)を先に出すと書いた後で、続けて〈道徳形而上学〉の基礎(Grundlage)は、『自然の形而上学』の基礎が『純粹理性批判』であると同様に、〈実践理性批判〉であるという。それなのに、なぜ基礎でなく基礎づけを先に出すかの理由を三つ挙げている。

「まず第一に、純粹実践理性批判はすでに刊行された純粹理論理性批判ほどぜひとも必要ではない。人間の理性は理論的で純粹に使用すると、全く弁証的(dialektisch)になってしまうのに、道徳においては常識によって(beingeminsten Verstande)容易に高度の正確さと、細事に到るまでなし逐げ能力をもっているからである。」

カントは常識の正しさ確かさを疑ってない。第一章の十一―十三節では、実際に義務である例をいくつも挙げている。常識はすでに、何が善か悪か、何が義務にかなない義務に反しているかに精通している。しかし常識も、あるところまでくると弁証的になる。第一章の二十一―二十二節は、常識とその哲学的分析の関係を論じている。普通の人間理性は、欲望や傾向に基づく格率に対抗して自分の原理の源泉と原理の正しい規定に関する知見や明確な指示をえておかないと、欲望と原理の両方の要求から生じる困惑や陥り易い曖昧な考えによって、真の道徳的原則をすべから失ってしまう危険を冒す。この自然的弁証論から常識を守るために、人間理性は哲学を必要とする。第一章は、この世で誰もが無制限に善と

みなしうるのは善意思よりほかにはない、という命題で始まるが、この誰もが常識的に確実として疑わない善意思を、カントは欲望と原理の角逐する人間理性の立場から捉え、善意思を「理性と意思を結合する義務の関係」として分析する。そしてこの分析を《基礎づけ》はどれほどにすればよいか、次の第二第三の理由につながってゆく。

「第二に、純粹実践理性批判に必要なことは、それが完全なものとなるために、実践理性は理論理性と共通の原理によって統一していることを同時に示さなければならぬ。なぜならこの原理は、ただその適用においてのみ區別されねばならない結局は同一の理性でしかありえないからである。しかし私はここでまだ、この原理をそこまで完全な形で示すことはできなかった。そうすれば全く別な種類の考察を引き入れて、読者を混乱させることになるからである。それで私は、純粹実践理性批判という題名かわりに、道徳形而上学の基礎づけという題名を用いたのである。」

《実践理性批判》は《純粹理性批判》との対応上、実践理性の全能力とその限界を厳密に批判しなければならぬ。更に実践理性は理論理性と同一の原理によって統一されていることを示すためには、《判断力批判》の構想をも必要とするであろう。それで本書の題名を《実践理性批判》とせず、《道徳形而上学の基礎づけ》としたという。すなわち道徳形而上学の基礎としての《実践理性批判》でなく、道徳形而上学の基礎の序論として、実践理性の部分批判を扱う道徳形而上学の基礎づけとしたというのである。この第二の理由は、明かに《基礎づけ》の軸が第三章にあることを示している。ところで《道徳形而上学の基礎づけ》という本書は、道徳形而上学の基礎でなく、道徳形而上学の基礎のまたその序論であるが、ではなぜカントは、本書を基礎の序論、つまり実践理性批判

判の基礎づけとしなかったのか。このことは、基礎づけの比重は実践理性批判それ自身にあるよりか、あくまで道徳形而上学の基礎づけにあることを指示しているのではなからうか。第三章の題名「道徳形而上学から純粹実践理性批判への移行」は、まさに道徳形而上学が実践理性批判を必要とすることを示しているが、序文十四節に予示された第三章の題名は「道徳形而上学から純粹実践理性批判への最後の一步」となっている。当時カントは、道徳形而上学の基礎づけは、さしあたり道徳の領域へ実践的自由を根拠づけることによって果しうると考えていたのである。第三章は、第三章それ自体の問題としてあるのでなく、あくまでも第二章の基礎づけにあると考えてよいであろう。

「ところが第三に、道徳形而上学は題名はいかめしいが通俗性と常識への適合性が可能であるから、基礎のこの序論を道徳形而上学から分離した方が、この序論で避けることのできない扱いにくに議論 (das Schutle) を、将来もっと分り易くなる理論 (faglichen Lehren) に付け加えなくて済むのに有益であると、私は考える。」

第三の理由は、《基礎づけ》を道徳形而上学それ自体から分離すると書いてないことに注意した上で、二つに分けて考察しよう。(1)《道徳形而上学》は通俗性と常識への適合性が可能だから、将来もっと分り易くできうる理論である。(2)この《道徳形而上学》から、むずかしい精緻な議論を扱う基礎のまたその序論を分離する。

(1) ここで将来もっと分り易くできうるといわれる《道徳形而上学》は、いうまでもなく十一節の冒頭で、他日に発表すると書かれた《道徳形而上学》のことだと考えて間違いない。したがってカントはすでにこ

の時点で、他日に発表する予定の〈道德形而上学〉の構想を、通俗性と常識への適合性、もっと分り易くできうる理論として考えていたのである。この構想は、実際に公刊された《道德形而上学》(一七九八)の構想と同一路線にあるとみてよからう。《道德形而上学》は年月の隔たりによって、その内容に〈法論の形而上学的基礎論〉を含める等の大きな変更はあったが、〈徳論の形而上学基礎論〉は、カントが序文七—十節で述べている純粹道德哲学としての道德形而上学と比較して、かなり分り易くしうる理論の実現とみてよからう。カントは《基礎づけ》で道德形而上学の純粹に合理的部分を(ダンカンによれば一時的離脱によって)扱ってしまったから、実際の《道德形而上学》は予定を変更してその適用ないし応用を扱うことになったのではない。

(2) こうしてカントは、むずかしい精緻な議論をする現在の〈基礎の序論〉を、もっと分り易くしうる将来の〈道德形而上学〉から分離するという。しかしこの文脈から、この序論を純粹道德哲学としての道德形而上学、すなわち道德形而上学の純粹に合理的部分からまで分離するのは、絶対に読めない。先の第二の理由によって、我々は基礎づけの比重は〈基礎のその序論〉ではあるが、〈実践理性批判の基礎づけ〉という意味よりか、文字通り〈道德形而上学の基礎づけ〉にあるとみた。ならば基礎づけの目的は、将来の平易にしうる〈道德形而上学〉を分離し、道德形而上学の純粹に合理的部分を基礎づける(批判することにあると解せるのではあるまいか。基礎づけは実践理性の部分批判として第三章で扱われるが、この三章は道德形而上学の平易にしうる部分を分離し

た第二章の純粹道德哲学の理念的部分を基礎づける役割を果す。これが、扱いにくい精緻な議論をするという《道德形而上学の基礎づけ》の意図ではあるまいか。

もしこの推定に誤りがなければ、序文七—十節、十四節、および第二章で、すなわち現に《基礎づけ》で扱われている道德の形而上学と、一節冒頭で他日に発表すると予告され、そして十二節で将来もっと分り易くしうると書かれた〈道德形而上学〉とは、当時においてすでに、その意図と内容に大きな違いがある。道德形而上学の純粹に合理的部分は、《基礎づけ》の中で議論されるのは当然である。第二章は《基礎づけ》の意図にそい、第三章のために、そして第三章は《基礎づけ》の意図にそい、第二章のために、必然的な構成位置を占めるのである。

三

序文十一—十二節の分析によって、我々は第二章と第三章は密接な関係にあると読んだ。さて、カントは続く十三節の冒頭で、「現在の基礎づけは道德の最高原理の探求と確立にはかならない」と書いている。するとこの道德の最高原理は、これまでの序文の読み方に従うと、本文の各章でどんな枠組を与えられてゆくか。その構造連関を最後に略述しておきたい。

第一章は善意思の哲学的分析である。この分析は、善意思を、理性と意思を義務として結合する関係として捉える。そしてその一般的記述

を、道德の原理として二様に表現する。一人称で、「私は私の格率が普遍的な法則となるべきことをも意欲できる。」(十七節)次に二人称で、「君は君の格率が普遍的な法則となることをも意欲できるか。」(十九節)常識の一般的哲学的反省によって、カントはすでに善意思の構造とその道德の最高原理としての記述にほぼ到達している。しかしカントにすれば、これではまだ学的認識と批判的作業が欠けている。

第二章の構成は四つに分ける。

A (一一一節) 第二章および第三章を指向する導入部で、通俗的道德哲学を道德の形而上学へ純化する学的必然性と、そのために先天的実践的な理性能力を徹底的に批判する必然性との、二つの学的必然性が説かれる。

B (一二一三十一節) この二つの学的必然性の相互関係は、まず第一章の道德の原理を、一つの定言命法に整えた上で明かにされる。カントは命法を仮言的と定言的に分け、前者を更に蓋然的―熟練の規則と実然的―利口の忠告に区別し、後者を必然的―道德的命令とする。カントはこの区分を、《純粹理性批判》の様相判断に対応させ、定言命法Ⅱ必然的判断に、定言命法と先天的総合判断の等値を意味する学的認識の形態を与えている。そして彼はこの定言命法を、一方で道德哲学を学的に構成する根拠として示し、他方で実践的総合判断の可能性を与える根拠として示す。一方は第二章を更に先へ進む道を取り、他方はその成果を踏まえた上で第三章へ取り組む。カントはこの二つの学的認識の分岐点を二十九節で明示してから、三十一節で一つの定言命法を表現しているの

である。

C (三二―七十五節) カントは定言命法を更に理論理性に対応させ、量の範疇に合せて命法の副次的形式を、第一形式(単一性)、第二形式(数多性)、第三形式(総体性)として示し、先天的総合判断としての学的認識の形態を倫理学の領域へあてはめる。この副次的形式の主要意図は、それが単に道德行為のテストに使えらるることにあるのではなく、普遍的自然法則、目的の国、意思の自律と進むことによって、あくまでも善意思の内容を徹底的に開示しようとする道德哲学の学的純化にある。善意思は、《道德の最高原理としての自律》にまで純化される。

D (七十六節以降) BとCの内容を再説しながら、終節で道德形而上学(第二章)と実践理性批判(第三章)の構造連関が鮮かに説明されている。

「このような総合命題はどうして先天的に可能であるか、またこの命題はなぜ必然的であるかは、もはや道德形而上学の範囲内では解決できない問題である。――そこでこの章も第一章と同じく単に分析的であった。ところで道德が決して妄想でないことは、定言命法と意思の自律が真であり先天的原理として絶対的に必然的であるならば当然であるが、そのためには純粹実践理性の可能的総合使用を必要とする。しかし我々はその前にまず、この理性能力それ自体を批判することをしなければ、この総合使用を敢えてすることを許されない。そこで我々は最後の章で、我々の意図にとって充分な要点を述べ予定である。」

第三章は、《自由の概念は意思の自律を解く鍵である》という見出しに始まる。第一章で理性と意思を義務として結合する関係を記述した道德の原理は、第二章で定言命法という学的認識の形態を与えられた。純

粹道徳哲学は定言命法という学的認識の粹組にはめ込まれ、第三章でいまやその実践的総合使用の可能性が問われている。意思の自律は、定言命法はいかにして可能であるかを明かにすれば確立するが、それを解く鍵は自由の概念である。第三章は自由の先験的演繹によって、善意思の分析を、道徳的常識へ総合再生する課題を荷っている。

したがって第二章の道徳形而上学は、通俗的道徳哲学を定言命法によって純化した学的事実であり、第三章の実践理性の批判は、この学的事実の可能性を自由の先験的演繹によって明かにしようとする。この手続きは、カントがすでに『純粹理性批判』で、自然科学の学的事実に先験的演繹（権利根拠）を問うた課題に対応する。

さてここまでくれば、保留しておいたダンタンの推定は不当であることがおのずと明かになるであろう。定言命法はダンカンのいうように、確かに義務によって自愛が拒否される種類の意思を記述する原理（第三章）と、行為の規範的規則（第一章）との両義性を表わすが、それは決して一個の分析的石で二羽の哲学的鳥を射止めようとしたのではない。一つの定言命法が学的事実を構成する作業（第二章）と、その権利根拠を問う批判的作業（第三章）の両方に用いられることは、カントの批判哲学の特色なのである。

注

Duncan, A. R. C., *Practical Reason and Morality*, pp. 175~178,
Thomas Nelson and Ltd., Edinburgh, 1957.